

2026 年 2 月 22 日 上 田 勉

牛と生きる、笑顔の日々 24 歳・新米酪農家、故郷で再スタート 一時全町避難の檜葉町・蛭田(ひるた)牧場 / 福島

「牛が鳴き声を上げ、牛舎の床をひづめで打つ。檜葉町の山あいにある蛭田牧場は、約 130 頭の牛の物音でにぎやかだ。15 年前の東京電力福島第 1 原発事故により一時は全町避難を経験した故郷で、新米酪農家の蛭田あやのさん(24)は日々、笑顔で牛と向き合っている。

「ここ以外考えられない」。大学で酪農を学び、父博章さん(57)が営む牧場に戻ってきたのは 2024 年春のこと。25 年 12 月半ばに訪ねると、あやのさんは早朝から搾乳にとりかかった。午前分の 34 頭を終えて「だんだん慣れてきた」と話し、子牛の世話へと向かった。

牧場は 17 年に再開。この日は、牧場の再出発に向けて最初に生まれた牛「スタート」の出荷があった。名付けたのは、あやのさんだ。自らの手でトラックに載せ、見えなくなるまで見送った。

震災時は小学 3 年生。春休みを目前に控えた帰りの会の途中、激しい揺れに襲われた。波打つ窓ガラス。津波が迫っているという話に「死ぬかもしれない」という恐怖を感じた。

檜葉町は、第 1 原発からおおむね 20 キロ圏内に位置する。原発事故により全町避難となり、直後は県内を転々とし、東京の親族宅へ身を寄せたこともあった。内陸部の会津地方での生活を経て、中高時代は沿岸部のいわき市に移り住んだ。

牛は友達で、家族のような存在だった。放課後には一緒に散歩をしていた。事故当時に飼育していた約 130 頭は、博章さんが避難先から通って世話をしたが、最終的に衰弱するなどして全頭死んでしまった。

事故から何年かして訪れた際、牧場からは物音が消えていた。その時の静かさや寂しさが、心に残っている。

避難後も「牛と一緒にいたい」と願い、中学 3 年の時には、酪農の道を歩むと決めた。高校卒業後、北海道の帯広畜産大に進学。酪農の基本を身に付け「やるしかない」との思いで故郷に戻ってきた。

檜葉町は 15 年に避難指示が解除された。震災前の人口は約 8,000 人で、25 年末時点の町内居住者は約 4,500 人。小学生の頃の友人はほとんど残っていない。定期的な牛乳や餌の牧草の放射性物質検査は続けており「異常なし」との結果が出ているが、風評被害は今も残っていると感じる。

だからこそ「今できるのは『安心、安全』を続けていくこと」。あやのさんは牛に牧草を与えながら、そう口にした。「(毎日新聞) 2026/2/22 地方版」



出荷の日を迎えた乳牛「スタート」と触れ合う蛭田あやのさん＝福島県檜葉町で（「毎日新聞」）



【桜を見て“モーきれい”－蛭田（ひるた）牧場（檜葉町）】（2024年4月15日撮影）